中野先生の追憶

大鳥蘭三郎

中野操先生が亡くなられてからはや二年経過した。思えば日本の医史学者として特異な存在であられた中野先生がおられなくなったのは何としても惜しい限りである。

中野先生と私がとくに知り合ったのは、昭和二十二年に大阪で開かれた日本医学会の医史学部門の会長として先生が活躍された時以来のことである。先生を追悼する文は前に書いたことがあるので、今回はこれとなるべく重複することを避けて記すことにする。

先生は医史学関係の論著を多く発表されているが、私が思うには何と言っても『日本医事大年表』がもっとも力作である。この本は昭和十七年二月の出版で、初めは『皇国医事大年表』の名のもとに刊行された。その後戦争が終りあらゆることが変革した時に『皇国医事大年表』が『日本医事大年表』と名を変えて昭和四十七年に刊行された。著者の絶えざる努力によることは勿論であるが、年表の性質上特殊な印刷上の技術を越えて南江堂と思文閣が協力を惜しまなかったことも忘れるべきではない。

本書は日本で医史学上の研究論文を著わす時には必ず参考されるものであるが、私がとくに感じ入ったことは本書の巻末に載せられている索引である。索引を作ることは多くの注意と忍耐とを要するものであるが、本書の索引はその正確なことにおいて敬服せずにはおられない。

中野博士の諸作は関西方面の医学に関するものが中心をなしているが、その中で博士はとくにあまり知られていない方

面の事柄についてとくに関心を寄せられていた。とくに、京阪地方の民間医学者の事績については心をこめて研究をされていたことも銘記されるべきである。

なお、博士が収集された絵画と医学との関係を示すものも、後進の人々に対して大きな指針となったものである。麻疹、コレラ等の流行、さらには産時に関する諸々の風習を描いた版画等についても貴重な考証を試みられている。

さらに忘れてならないのは、先生が『医譚』の発行に力を注がれたことである。『医譚』は京阪地方を中心とする億川摂三、大矢全節、中野操等諸先生の発企により昭和十三年二月に杏林温故会が興り、その機関誌として発刊されたものである。この雑誌の発行により関西方面の医史学上の研究が大いに発展したのであるが、同会の存続に力を尽くされた先生方が次々に死去された後も、中野先生は『医譚』の発行に熱心に当られ、独力を以てまったく献身的に長期に亘って努められたことは実に頭が下る思いである。これとあわせて思い起すことは、先生の奥様が協力を惜しまれなかったことで、私は関西支部の会合につとめて出席したが、その何時の場合でも、夫人が献身的に尽くされていたご様子を忘れることは出来ない。その奥様も今はすでに他界されているのは悲しい極みであるが、泉下に在って先生と共に医史学の発展を見守っておられることを信じたい。

（日本医史学会理事長）

中野操先生を慕う

後学　三木　栄

中野操先生（以下大兄と略称）は、『医譚』の編集発刊を中心とし、日本医史学会並びに同会関西支部の発展に尽くされ